

Annual Report 2019

神戸大学
農学研究科
地域連携
センター

令和元年度
活動レポート

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 (A103号室)

Tel 078-803-5939 E-mail ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp オフィスアワー 火・金 13:00~16:00

Center for Regional Partnership
Graduate School of Agricultural Science
Kobe University

地域連携センターの役割

近年大学では、教育、研究と並んで社会貢献の重要性が増してきています。農学研究科地域連携センターは、神戸大学が保有する知識や技術を、農山村地域の問題解決および価値創造において積極的に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的に、2003年に創設されました。

地域連携センターに求められている主要な役割に、地域のシンクタンク機能、地域で働く人材養成機能、相談支援機能があります。こうした機能を果たすべく、地域住民、行政、NPO等と農学研究科を結び、その活動をサポートする中間支援の役割を担っています。同時に、センターが中心となり、共同研究、セミナー、ワークショップ、意見交換会などの地域交流を積極的に実施し、社会貢献を進めています。農学研究科地域連携センターの主な事業は次の3つです。

(1) 地域共同研究 (2) 地域交流活動 (3) 相談・情報発信

農学研究科は、「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究することを基本目的としています。当センターでは地域と知を共有し問題解決・価値創造に貢献することにより、ともに発展することを目指して、活動を進めています。



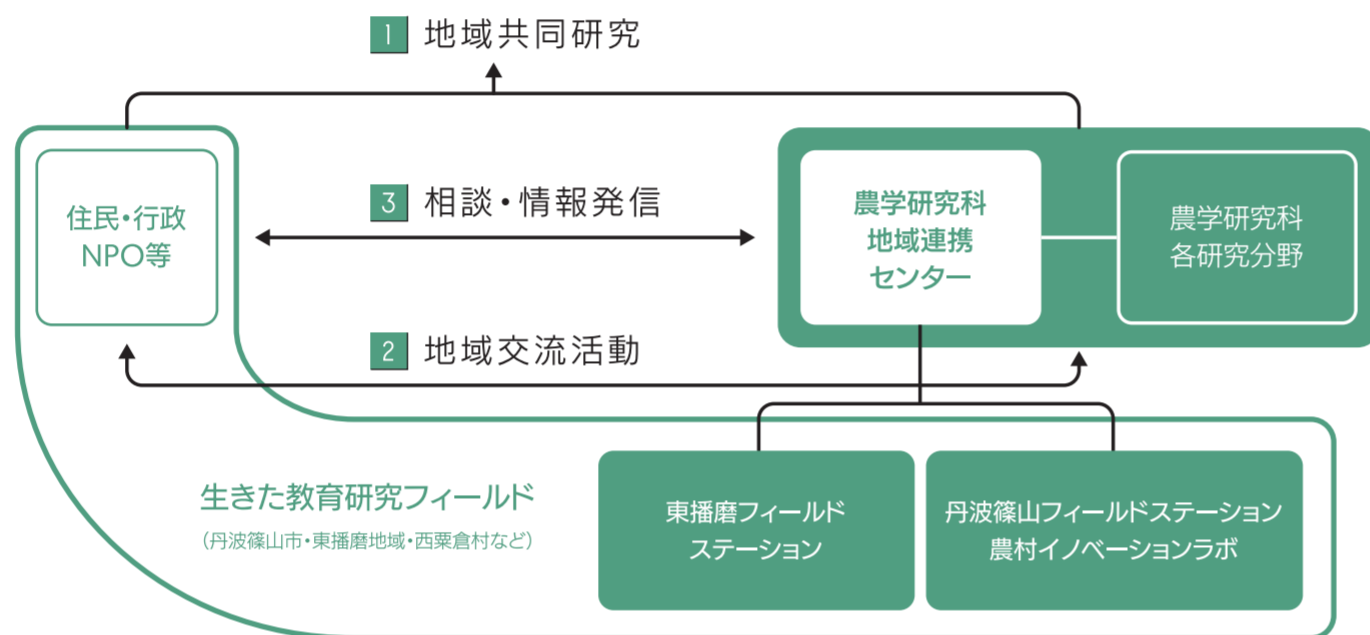
ごあいさつ

農学研究科では、丹波篠山市に「丹波篠山フィールドステーション」を、東播磨県民局、京都大学、兵庫県立大学とともに加古川市に「東播磨フィールドステーション」を設け、これらの拠点を活用した教育研究活動と地域連携活動を推進しており、岡山県西粟倉村との連携協定も締結して活動の範囲を広げています。また神戸大学は、文部科学省COC+事業「地域創生に資する実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業(2015~2019年度)に取り組んでまいりましたが、2019年12月には、当センターが日本学術振興会からのCOC+フォローアップ現地視察を受け入れております。また、当センターが活動を支えている学生団体の一つである「にしき恋」が、2019年12月に農林水産省「食と農林漁業大学生アワード2019」最優秀賞(農林水産大臣賞)、兵庫県「第21回人間サイズのまちづくり賞」まちづくり活動部門知事賞を受賞、同年11月にも兵庫県「あしたのまち・くらしづくり活動賞」優秀賞を受賞する等の活躍がありました。この「活動レポート」は、2019年度に当センターが実施した活動をとりまとめたものです。我々の活動への理解を深めていただく一助になるとともに、地域の持続的な発展に役立てば幸いです。

田中丸治哉

組織体制

地域連携センターは、農学研究科および神戸大学地域連携推進室のもとに組織されています。常勤および非常勤の地域連携コーディネーターを中心に、農学研究科教職員や各種地域団体と連携を図りながら事業を推進しています。また、学内外の幅広い知見や情報、それに基づく助言を得るためアドバイザーを設置しています。



2019年度スタッフ

センター長	田中丸治哉 (生産環境工学 教授、神戸大学地域連携推進室長)	
副センター長	中塚雅也 (食料環境経済学 准教授)	
運営委員	長野宇規 (生産環境工学 准教授)	黒田慶子 (応用植物学 教授)
	中塚雅也 (食料環境経済学 准教授)	藍原祥子 (応用生命化学 助教)
	松尾栄子 (応用動物学 助教)	鈴木武志 (環境生物学 助教)
地域連携 コーディネーター	木原奈穂子 (特命助教)	二階堂薫 (教育研究補佐員)
	柴崎浩平 (特命助教)	松永菜那 (事務補佐員)
	衛藤彬史 (学術研究員)	
アドバイザー	伊藤一幸 (神戸大学 元教授)	内平隆之 (兵庫県立大学 教授)
	高田 理 (神戸大学 名誉教授)	星 信彦 (神戸大学 教授)

1 地域共同研究

地域在来の醤油製造業存続に向けた研究
中塚雅也(農業農村経営学)
小規模事業者を中心に減退傾向にある醤油製造業について、文献調査、聞き取り調査を通して、事業者が抱える構造的な問題を明らかにした。今後も、持続可能な経営に向けた提言を目標とする。

ICTを活用した地域主体交通の展開可能性
衛藤彬史(学術研究員)
ICTを活用した地域独自の交通サービスを構築し、山間部において交通空白地問題を軽減している取り組みを事例に、新たな交通サービスを地域社会に実装する上での方策について考察した。

交通不便地域での持続的な送迎サービスの運営体制構築
衛藤彬史(学術研究員)
公的資金に頼らず、地域住民が送迎サービスを主体的に運営し、地域の足を確保するための取り組みを導入する上での課題と要点について、体制づくりの観点から明らかにした。

西粟倉村
バイオエコノミーを基軸とした西粟倉村の持続可能な開発目標(SDGs)達成
長野宇規(地域共生計画学)
西粟倉村は95%を森林が占める。間伐を適正に行い、また間伐材を商品にすることで森林の二酸化炭素固定量を増加させられることを分析から明らかにした。

広域営農組織の設立が地域農業に与える影響
木原奈穂子(特命助教)
集落営農およびそれらの広域的な組織を設立し、農業生産および畦畔管理等の管理作業を請け負うことが、農業生産の維持のみならず集落の維持に寄与するかを検討する。

地域ブランドの発展にかかる農産物認証制度への意識
木原奈穂子(特命助教)
既に国内においてブランドが確立された農産物に対する各種認証取得の意識調査および認証取得がブランドの発展に与える影響を明らかにする。

新規就農者の定着に地域特産品が果たす役割
木原奈穂子(特命助教)
地域農業の維持発展に期待がかかる新規就農者に、地域特産品の生産を推奨することが安定的な経営および地域への定着に貢献するか否かを検討する。

ため池管理における後継者育成手法の開発
柴崎浩平(特命助教)
ため池を管理していくためには、何ができないといけないか。現代にあった管理方法とはどのようなものか。ため池管理者への聞き取り調査やワークショップを通して検討する。

再生可能エネルギーを活用した地域づくりの検討
柴崎浩平(特命助教)
ため池ソーラー導入における課題や可能性を、聞き取り調査を通して明らかにするとともに、地域づくりに活用していくための方向性を検討する。

里山の価値の創造に向けたシステムの構築
柴崎浩平(特命助教)
現地研修会やセミナーの開催を通して、雑木や雑草などの里山資源を適切に管理し、活用していくためのシステムを構築していく。

兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発
長野宇規(地域共生計画学)
衛星画像と美土里情報システムの農地GIS情報を組み合わせることで、圃場毎の土地利用を判別する手法の開発を継続した。

新しい特産品づくりに関する研究“香りヤマナシ”栽培の可能性
片山真剛(食資源教育研究センター)
遺伝的多様性の観点から、遺伝資源としてのヤマナシを保存するだけでなく、利用しながらの保全を目指す中で、その一部を丹波篠山市真南集落に移植し、6次産業化に向け準備を進めている。

駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究
鈴木武志(土壌学)
アカミミガメをはじめ、アメリカザリガニ、ブラックバス、ブルーギル等が篠山城跡での生息が確認されており、生態系への影響が問題視される中、駆除したこれら外来生物の有機肥料としての活用を目指す。

ため池管理における後継者育成手法の開発
柴崎浩平(特命助教)
ため池を管理していくためには、何ができないといけないか。現代にあった管理方法とはどのようなものか。ため池管理者への聞き取り調査やワークショップを通して検討する。

再生可能エネルギーを活用した地域づくりの検討
柴崎浩平(特命助教)
ため池ソーラー導入における課題や可能性を、聞き取り調査を通して明らかにするとともに、地域づくりに活用していくための方向性を検討する。

里山の価値の創造に向けたシステムの構築
柴崎浩平(特命助教)
現地研修会やセミナーの開催を通して、雑木や雑草などの里山資源を適切に管理し、活用していくためのシステムを構築していく。

里山植生の把握と森林資源の利用
黒田慶子(森林資源学)
丹波篠山市の里山林で植生調査を行い、竹林伐採や薪生産などの資源利用の重要性を学んだ。また、猟師と連携してニホンジカの解体と食肉利用を体験し、里山管理を取り巻く課題を理解して解決方法を検討した。

地域固有性の発現と農村発展モデルの確立
中塚雅也(農業農村経営学)
地域資源の「固有性」の本質を理論的に整理するとともに、丹波・丹後地域を中心とした事例分析により、その地域固有性を見だし、育て、農村・農村の発展に繋げるためのフレームワークを提示した。

2 地域交流活動

「フォーラム、研究会、セミナーの開催

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し、地域の発展につながるような取り組みを実施しています。

【実施の概要】

1. 地域連携研究会(A-Launch)

第17回 6月4日
「ウシノ感染症-予防-治療法へ向け」
話者提供 松尾栄子/応用動物学コース
第18回 1月21日
「暮らしの足らざる持続可能な村づくり」
話者提供 衛藤彬史/地域連携センター

2. 地域連携ゼミ

地域連携に関わる専攻の研究者が中心となった自主的な研究会(今年度は計10回)

3. バイオエコノミー研究会

第3回 5月6日「生物多様性ビジネスの最新動向」
話者提供 藤木庄五郎/株式会社バイオーム
第4回 10月31日 The Bioeconomy Approach: Constraints and Opportunities for Sustainable Development
話者提供 Dr. Nagothu Udaya Sekhar (NIBIO) /クワエーバイオエコノミー研究所
第5回 1月24日「日本の森林管理とそれを担う林業事業者の組織マネジメント」
話者提供 橋崎達也/FOREST MEDIA WORKS Inc. 代表

4. 農の学び場(Rural Learning Network)の開催

第28回 7月19日「田圃回帰の経済性:農村での生活が生み出す価値とは?」
話者提供 立見淳哉/大阪市立大学経営学研究所准教授
第29回 8月19日「ため池の新たなエネルギー活用可能性 ~エネルギーの生み出し方と使い方は?~」
話者提供 井筒耕平/株式会社sonoraku 代表取締役
第30回 11月8日「山探りビジネス~雑木を売って里山を守る方法とは?~」
話者提供 西山隆太/リベンジノール研究所
第31回 1月29日「草刈り人材の育成~「講師」グループをつくりませんか?~」
話者提供 木原奈穂子/神戸大学大学院農学研究所

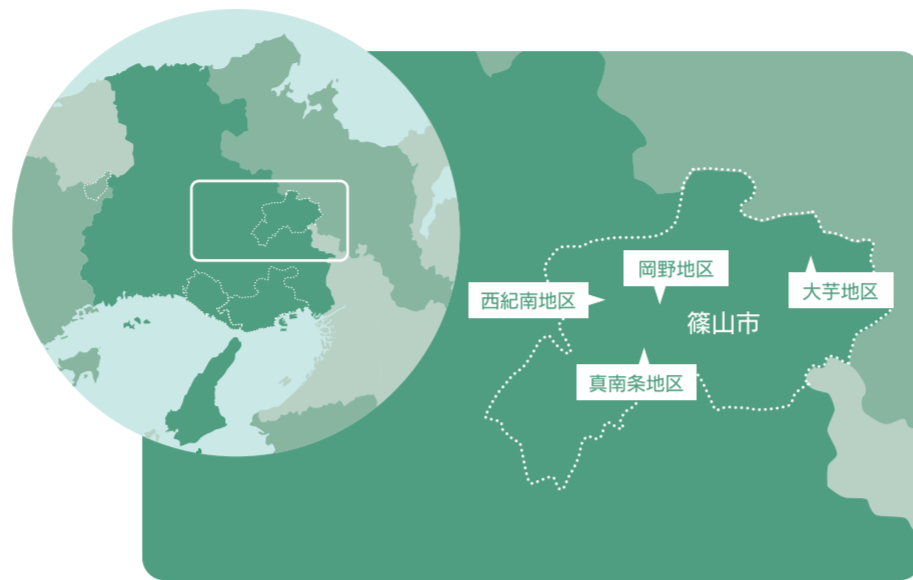
「ノラバ」の事務局運営

農村ボランティアバンク KOBÉ「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と大学生・市民のマッチングを進めています。2019年度の申し込みは29件、27名の新規ボランティア登録がありました。



学生地域活動サポート

地域と連携した取り組みを進める学生団体に対して、情報提供、情報発信サポート、相談対応など、活動の発展と充実に向けた支援を実施しています。今年度は、3団体(にしき恋、AGLOC、おくものがたり)による活動を支援しました。また、丹波篠山市で活動する学生団体間で相互に情報共有することを目的に、「篠山学生活動団体連絡協議会(さされん)」を組織して、運営を支援しています。さらに、学内での取り組みとして、丹波篠山市で活動する学生団体が農家とともに生産した農作物(黒大豆等)の直売所として「ささやま家(や)」を2013年度に開設。生産から販売までの過程を経験できる機会となっています。



神戸農村スタートアッププログラムの企画・協力

神戸農村 START UP PROGRAMME

神戸農村スタートアッププログラムは、神戸市の農村地域(北区・西区)での起業や事業づくりに特化した、創業支援プログラムです。当センターでは、プログラムの企画に協力しています。2019年9月より実施しており、19名が第一期生として農村地域の実情や、農村地域で起業する上での心得などを学びました。(神戸市主催)

セミナー

食・農・環境ビジネスに関する現場発の理論やノウハウを学ぶことを目的に、事業者や専門家などを講師に、全13コマのセミナーが実施されました。テーマは、スタートアップに関連した内容やライフスタイルに関する内容で、農村で実際に事業を進める上でのプロセスを学びました。



現地ワーク

神戸の農村(北区、西区)を実際に訪れ、その場所と人々、そして仕事を知ることを目的に、現地ワークを実施しました。今年度は、計4回(北区大沢町・北区淡河町・北区山田町・西区神出町)実施し、農園や市内で活躍する事業者の仕事場を訪れました。



ビジネスモデルの構築

経営コンサルタントや投資関係者などを講師に、事業を通して実現したい社会について考え、そのためのビジネスモデルを構築しました。ディスカッションを重ねながら想いやアイデアをあたりにすることを支援します。



地域農産物販売による地域PRにしき恋

神戸大学内や新大阪など都市部のマルシェで、丹波篠山市の西紀南地区で栽培された黒枝豆を販売しています。2019年度は10月に黒枝豆を、12月に黒豆(乾物)を販売しました。どのように販売すれば、より良い地域PRにつながるのかを考えながら取り組んでいます。



留学生と農村地域の交流促進 AGLOC

神戸大学の留学生に日本の農村地域の魅力を感じてもらうため、現地ツアーや丹波篠山市の岡野地区で一緒に農業体験をしています。10月26日には、留学生と一緒に城下町観光や特産品である黒枝豆の収穫体験を実施しました。



「食と農林漁業」大学生アワード2019最優秀賞を受賞にしき恋、AGLOC

農林水産省主催の、食と農林漁業に関する活動に取り組む大学生グループを対象とした活動発表コンテスト「食と農林漁業大学生アワード2019」に、にしき恋とAGLOCが参加し、にしき恋が最優秀賞(農林水産大臣賞)を受賞しました。



地域拠点施設の活用

おくものがたり 丹波篠山市大学地区では、現在、閉校となった小学校の活用を検討しています。おくものがたりでは、施設を活用したイベントの企画や手伝い等を通じて利活用のアイデアを考え、今年度は、12月15日に大学小学校でクリスマス会を実施し、地域の子どもたちと交流を深めました。

3 相談・情報発信

ホームページ等による情報発信

地域連携センターのHPでは、地域での共同研究や交流活動の内容、関連イベントについての紹介等を、食農コープ教育プログラムのHPでは、授業のレポートを発信しました。活動に携わる学生や地域の方々が、より日常的に地域連携センターの最新情報に接しやすくなることを目指して、Facebook等のSNSを通じた情報発信も行っています。

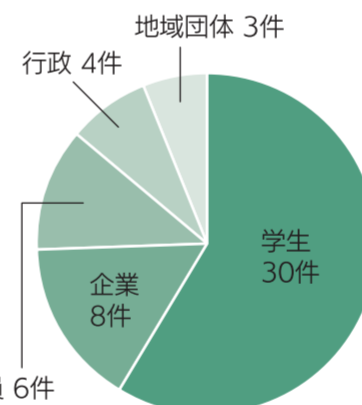


地域連携センター
<https://kobe-face.jp/renkei>
<https://www.facebook.com/kobe.univ.agri.renkei/>

食農コープ教育プログラム
<https://kobe-face.jp>

オフィスアワーの実施

大学と地域をつなぐ拠点として、所属するスタッフが各種相談に対応しています。2019年(1~12月)は、51件の相談が寄せられました。主な相談者は神戸大学生・大学院生(30件)で、内容は地域共同研究や食農コープ教育、地域活動などに関する相談でした。次いで企業8件、教員6件、行政4件、地域団体3件と続き、幅広く相談を受け付けています。



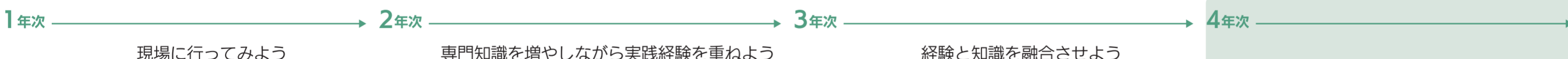
オープンキャンパスでの展示

2019年8月に開催された神戸大学農学部オープンキャンパスでは、食農コープ教育プログラムのカリキュラムや授業風景などをパネルで紹介しました。食農コープの授業を通じて結成された学生活動団体の活動についても、学生が自ら紹介しました。



4 食農コープ教育プログラムの推進

農学部では、食や農の現場において課題解決に貢献できる人材の育成を目指し、協力教員とともに「食農コープ教育プログラム」に取り組んでいます。特に、現場での実践活動を伴う科目の内容を充実させるよう取組みを進めてきており、当センターはプログラムの事務局として、次の3つの科目の運営を支援してきました。



農家に師事する 実践農学入門 1年次通年(選択2単位)

農村地域(丹波篠山市)において、地元農家を指導員とし、農作物の栽培や、むら仕事を体験しながら、農業や農村生活への理解を深めることを目的としています。2019年度は、玉水まちづくり協議会(城北地区)を受け入れ先として、47名の学生が16戸の農家に分かれて黒大豆の栽培を中心とした農作業を体験しました。

現場の課題に参画 実践農学 2年次通年(選択2単位)

農業農村の発展に関する現場での調査やインターンシップ型のプロジェクトへ参加し、農村地域の産業・環境・社会を理解するための基礎的な技術や能力、および企画立案や調整能力を身につけることを目的に、2019年度は4つのプロジェクトに、計17名が参加しました。

支える仕組みを学ぶ 兵庫県農業環境論A/B 2年次 第3Q/第4Q(選択1単位)

兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開を体系的に正しく理解し、批判的に評価した上で、適切な対策を提案する力を養うことを目的としています。兵庫県農業環境論Aでは、兵庫県職員、農林水産省職員、JA職員等を講師に迎え、オムニバス形式で講義を実施しました(履修者数:109名)。兵庫県農業環境論Bでは、「県産農産物の推進」、「環境創造型農業を浸透させるには」の2つのテーマで政策立案に向けたワークショップを実施しました(履修者数:29名)。

